Hard-boiled Wonderland

鼠の心

村上春樹の研究読本

HAPPY JACK 鼠の心

―村上春樹の研究読本

発行　一九八四年一月一〇日　初版第一刷
0095-30053-7840
編集人　高橋丁未子
発行人　渡辺　誠
発行所　北宋社
東京都文京区水道二―七―四―五〇一
電話〇三（九四三）五六〇一　〒112
印刷製本　日本製版株式会社

★定価はカバーに表示してあります。

I

僕の〝僕〟と僕の〝鼠〟の場合　仲畑貴志　7

海辺の長い夏休み　速水汲子　12

図書館を10倍楽しむ方法　木立麻美　18

アイス・コーヒーを魔法瓶にいれて　沢野ひとし　21

II

おぼえる者もおぼえられる者も　和魂洋装の世界
村上春樹の小説の美点は、死に対して大ゲサではないことだ。彼の小説では実に多くの死者があっさりとあまり脈絡なく回想される。
征木高司　29

悲しい　僕をめぐる感情教育
「僕」は物語からはじき出されて泣くのである。その愚劣な世界で死ぬことができなかった自分を悲しんで……。
井筒三郎　39

村上春樹の消えて行く場所　逆説的メロドラマの極北
村上春樹には、詭弁的なきわどいフックで言葉を結び、ずらして行く思考の生々しいうねりが抜け落ちていた。
樋口尚文　53

カクレ抒情が濡れる時　マスターから脱け出す方法
こうした小説世界から我々が読みとることのできる行為は、立ち尽くすか、振り返るか、どちらかだろう。
ねじめ正一　63

III

善き牧者と聖なる羊　「羊」をめぐる寓意
ファン・エイク兄弟の描いた羊は、イエス・キリストに他ならない。
安達史人　75

現代性という神話　退屈さと斬新さと
現代という時代は何よりもまず退屈さによって定義される。
絓（すが）秀実　87

座談会「春樹」と「僕」をめぐって
プロの幽霊はタフでハンサム
すごく重い物が浮び上っているだけなの。そこにフワッとした布をかければ、ただ布が浮き上って見えるだけ。ホーバークラフトみたいな世界。
征木高司　渡辺守　高橋丁未子　99

Ⅳ

BGM辞典 **君の知らない風の歌** 三田格・編 117

僕と彼女たちのA DAY in THE LIFEに流れるMUSIC ON

1983年のラグビー・フットボール 浅井慎平

ジェイズ・バーとディラン 友部正人

長距離ランナーと西洋梨 安西水丸

ピンボールの後悔 峯 正澄 123―139

村上春樹の「夢みたいな現実」 山川直人

Ⅴ

自由なる者の涙 渡辺 守 149

弱さを受け入れた「非現実の凡庸さ」

聖杯伝説のデカダンス 四方田犬彦 153

限りない空白の陰画

無徴の有徴化 青木 保 158

羊とジーンズ

インタビュー■村上春樹と埴谷雄高

洞窟の中のメルヘン 月村敏行 163

恐らく作者は、洞窟と化した青春のなかで青春の相対化をはかったのだと思います。そのなかに「羊」を引き入れて、自分のつくってしまった鼠にケリをつけたんですね。

Ⅵ

ヒトリズムズムズ 三田 格 181

ライトビールをガブ飲みしても

アルコール中毒にはなれないだろう

居ごこちの良い喫茶店 有川 優 189

ミスター・ジェイズ・バーを探して 宇佐川英雄 196

不燃の青春 村上知彦 203

長谷川龍生 210

Ⅶ

1880〜1978

謎のない年譜 高橋丁未子・編 222

――羊をめぐる冒険へ出発する日まで

編集後記 254

村上春樹の研究読本

Hard-Jack

鼠の心

试读结束：需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

HAPPY JACK 風の心——村上春樹の研究読本

昼の光に、
夜の闇の深さが
わかるものか。

「風の歌を聴け」

HAPPY JACK 鼠の心

I

僕の〝僕〟と僕の〝鼠〟の場合

仲畑貴志

僕には友だちが数え切れないほどいて、しょっちゅう出会ったり別れたりを繰り返しているわけだ。その数え切れないという友だちの数というのを、もっと明解にしろと言われれば、数え切れないほどの一人とも言えるし、数え切れないほどの三十億人、さらには、数え切れないほどの自分自身ということもできる。困ったものだ。少しも明解じゃない。

ところで、友だちか、そうでないかは、どこで見分ければ良いのだろう。なによりも信頼できる関係であることと断定する人がいる。困ったときに助け合う、互助の精神に基づいていることと言う人もいる。また、遠慮することなく話合える間柄と言う人もいる。しかし、十代の僕には、もっと確かな尺度が必要だった。はっきりと敵と味方に分けたいと思った。敵でもない、味方でもない、その中間の存在というものが、どうも落ち着かなくさせる。いや、正直に言えば、恐かった。距離が見えないからだ。距離感の不安定な関係の中で立っていることが恐かった。その恐しさを払拭するために僕はケンカをふっかけて歩い

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ていた。そして、ひとりひとり、これは敵、これは味方と、距離を計っていたのだった。それは、ただプラスとマイナスのふたつがあるだけの乱暴な距離のとり方だった。

十代も終りの頃になると、僕はさらに新しい尺度を加えた。相手との関係を、自分自身の肉体に換えて量るという方法だった。

こいつのためなら、左手の小指一本。

こいつのためなら、片手一本。

こいつのためなら、片手片脚。

こいつのためには、爪も切らない。

こんなふうにして、友だちを睨みつけていた。

好きでやっている本人は良いのだが、相手にとっては迷惑な話だ。とつぜん好意か悪意かの二者択一を迫ったうえに、過剰な約束を負わされる。指一本の犠牲に値する好意を寄せられた友だちは、その重さに対して等価で応えることを要求されるわけだから。

もっとも、そんなバカバカしい要求に、まじめに応える人間が存在するはずがない。考えて見れば、たとえ気に入った自分自身というやつのためにでも、指一本、腕一本と失うことを望む者などいるわけがない。実際、現在の僕の身体は五体満足であるし、爪も適当に整えられている。もし、その要求に快く応え

るような、その頃の僕とまったく相似の友だちが存在したとしたら、きっと悲惨なことになっていただろうと思う。

まず僕が好意の証に一杯の酒を差し出す。と、彼が二杯の酒に好意を重ねて返す。それに応えて、僕が大切にしているライターを手わたす。彼が親の形身の腕時計を床に投げ付けて壊す。僕が指を一本切り落す。彼が二本の指を落す。僕が腕を、彼が脚を…、こうなると、悲惨を超えた滑稽の領域に入ってしまう。

こんな浅はかで無謀な尺度を振りまわして街をうろつき、疲れをため続けた僕は、二十歳の春、街を出た。そのとき、仲間の男たちとの間で、どんな別れをしたのか、記憶にはない。今想えば、仲間との別れに心を湿らせているどころではなかったのだ。もっと強い意志の力を必要とする別れがあった。それは、自分自身のある部分に対する別れ、というより切り捨てに近いものだった。

村上春樹は『羊をめぐる冒険』で、〝僕〟と〝鼠〟の決定的な別れを用意した。その過程になにか近しいものを感じる。

僕の内なる〝僕〟と〝鼠〟が擦れあい、傷つけあって、どうにもならなくなったとき、僕は安定した〝僕〟を選び、〝鼠〟と別れようと決意したのだった。おそらく、たとえささやかな部分であったとしても、自分の内なる何者かを切り捨てようとするなら、まず見知らぬ土地へ出ることだと思った。過去のすべてが登録されている街にいながら自分を変えるほどの意志の力を僕は持ちあわせていなかった。そんな僕にとって

見れば、まったく新しい環境というのは、実に心地良い。たとえそれが極寒の地であっても、冷め切った都会であっても。

村上春樹の〝鼠〟は〝僕〟と〝ジェイ〟に別れて街を出た。僕は、僕の〝鼠〟を捨てて街を出た。僕は、僕の〝僕〟をさらに安全な〝僕ちゃん〟にしたいと願っていた。面接などで、「彼はなかなかの好青年である。」と人事部長あたりに評されるところまで行きたいと思った。

しかし、僕は〝鼠〟を甘く見ていたようだ。〝僕〟の影に隠れて、ちゃっかりと新幹線に乗り込んでいたのだった。東京へ来てしばらくは僕の目を盗んではときどき現われ、〝僕〟に会って行くらしい。〝僕〟によれば、街にいたときのように、どうにもならない打ち明け話や、「オレ昨晩ウイスキーのボトル二本明けて、気がついたらドブの中で寝てたよ。」なんて話は、あまりしなくなったらしいが、あの暗い目付きは変わっていないと言う。

僕が、東京で〝僕〟度を上げるほどに〝鼠〟の出現は少なくなり、いっしか自から旅に出て行ってしまったようだ。

これから先のことは、自分でもまったくわからない。ただ、〝鼠からの手紙〟が届かないことを祈るのみだ。『羊をめぐる冒険』なんかに出掛けるのはごめんだ。たとえ姿の見えない闇の中での出会いであったとしても、皮膚から弱さを露出した〝鼠〟に会うのは悲しすぎるから。

しかし、また逆のことを僕は思う。僕の内なる〝鼠〟を許容したいと。うまく付きあえば、それほど危険な奴ではないと。その昔、街でしていたような、犠牲の押し売りと、過剰なやさしさで息苦しくなるような関係ではなく、ちょいとした心づかいを感じあえる程度の友だちとして。

「たぶん君にはわからないだろうな」と鼠は続けた。「君にはそういう面はないからね。しかしとにかく、それが弱さなんだ。弱さというのは遺伝病と同じなんだよ。どれだけわかっていても、自分でなおすことはできないんだ。何かの拍子に消えてしまうものでもない。どんどん悪くなっていくだけさ」

（『羊をめぐる冒険』より）

海辺の長い夏休み

速水汲子

裸足で砂浜を歩いていた。時折、寄せる波に膝まで折り曲げたズボンの裾が濡れそうになる度に、私の砂浜の上の足跡は方向を変える。もっとも、私はその足跡を振り返って見た訳ではない。海水は、丁度良い温度の心地良さで、いつまで歩いていても足が冷えることはない……と思う位だ。それでも大きな波は突然やってきてズボンの裾を濡らした。二、三度この大きな波にみまわれて、私は砂浜にすわる場所を捜した。

夏の間、たくさんの海水浴客がみやげに置いて行った空き缶や紙屑があちこちに見られる浜辺の比較的きれいな所をみつけて、私は腰を下ろした。空を仰いで眼をつむる。朝、出掛けに入れてきた〃サンセット・ブルース〃が、過ぎゆく夏を惜しむ様にウィンド・サーフィンに興じている若者達をさざめきの中に見え隠れさせる波の音と一緒に、遠くから聞こえてくる。

私のたった一日の夏休み…それは私が学生時代に過ごしたあの長い長い夏休みを凝縮したかの様な、時

の流れを認識させられた数少ない貴重な休日であった。

人影もまばらな初秋の海辺での午後、浜に腰を下ろした私の頭の中で思い描かれていたことは、学生だった頃の自分をとり囲む風景と共に私の中をすり抜けていった時たちであった。そしていつのまにか過ぎていったその時間の延長上に確かに今の自分がある、ということだった。そしてそれはそのまま、村上春樹作『風の歌を聴け』、『1973年のピンボール』から抽出した私の十九〜二十五歳迄のイメージと重なり合う。

大学をドロップ・アウトした私は『風の歌を聴け』の作中人物、鼠の持つけだるさを理解する。そしてこの小説の書き手である主人公の「僕」が、「あらゆるものは通りすぎる。誰にもそれを捉えることはできない。僕たちはそんな風にして生きている」と言い、それがこの三部作中の二作目の『1973年のピンボール』につながり、〈過去と現在についてはこの通り。未来については「おそらく」である〉とテネシー・ウィリアムスを引用した後、「僕」が、実は、現在でさえ不確かな「おそらく」であり、現在という瞬間が僕たちの体を唯すり抜けていくだけのことだと云っているところも、私には肯ける。私の十九〜二十五歳はこの鼠と「僕」の思考の間を揺れ動いていた時期ではなかっただろうか。例えば、強さの概念だ。鼠はある時ある女の子に言う。「人間は、生まれつき不公平につくられている」と。鼠がそのけだるさの中で出会った海辺に住む彼女を「僕」に会わせると言って、止めた後の「僕」との会話は印象的だ。「僕」は言う。条件

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com